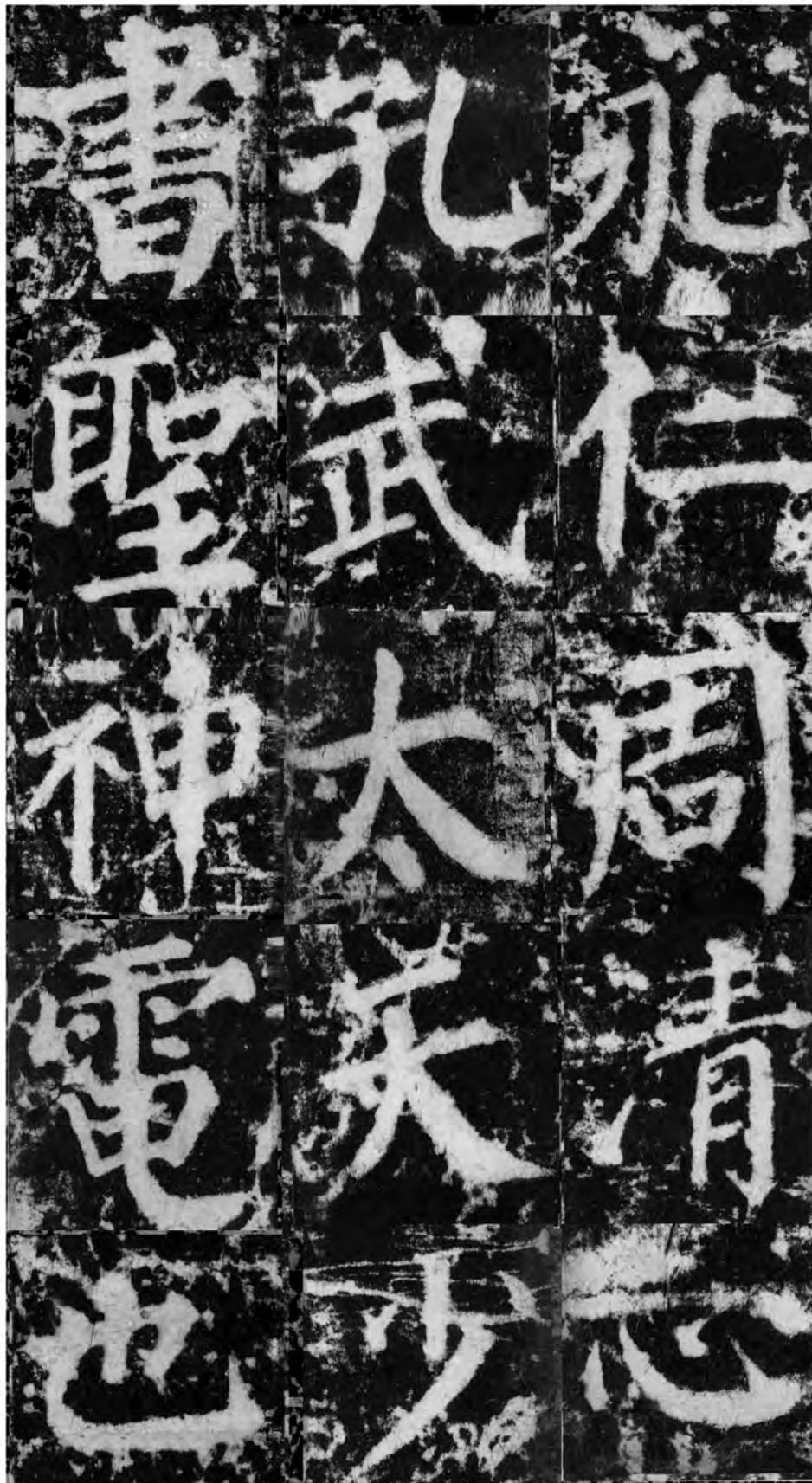


主图版

郭氏家廟碑（集字）

顏氏家廟碑



# 「顏真卿の書」⑧

## 郭氏家廟碑

唐・広徳二年（764年）



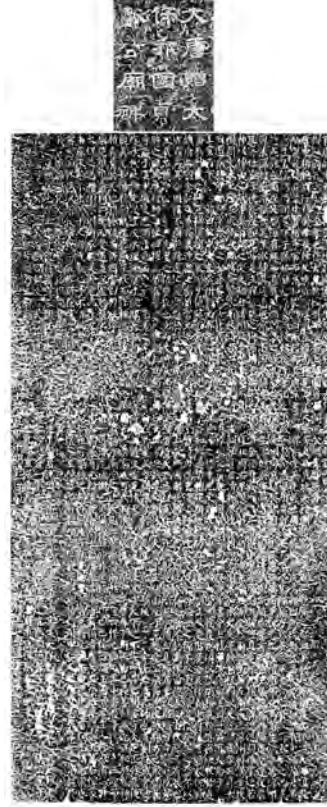
補助図版①郭氏家廟碑・碑額



補助図版②郭氏家廟碑・碑陽

郭氏家廟碑は、顏真卿展では碑陽の整拓軸装本が展示されていた。碑面の破損が他の碑に比べて全体的にあるので、碑文の文字を鮮明に見ることができず、多くの方にはあまり印象に残らなかつたのではないかろうか。この碑は、唐時代の名臣・郭子儀が、父・郭敬のために建立した家廟碑である。碑額は隸書十二文字、碑文は三十行、一行あたり五十八字からなる（補助図版②）。もともと西安府の布政司署に置かれていたが、1950年西安碑林に移された。重厚であるが、顏氏家廟碑に比べて、伸びやかである。碑陽の文字は、破損の少ないものを集字して、その書風を確認できるように顏氏家廟碑と比較対照した（右ページ主図版）。またこの碑の大きな特徴は、碑額の書である。碑文の巻頭に、「顏真卿の筆で「御題額」とある。碑額の「大唐贈太保祁國貞懿公廟碑」十二字の隸書（補助図版①）は、玄宗皇帝の孫にあたる代宗皇帝の御筆である。玄宗皇帝が善くした隸書を受け継いだ書風である。この珍しい碑額も展覧拓本には、欠けていた。またこの碑で注目されるのは、碑陰の書である。碑陽の書法の楷書とは異なり、珍しい書風である。次号で碑陰の書を紹介しよう。

伊藤滋（書齋名・木鷦室）



# 書道芸術院

## 令和の群像 (2019)



東 原 春 城

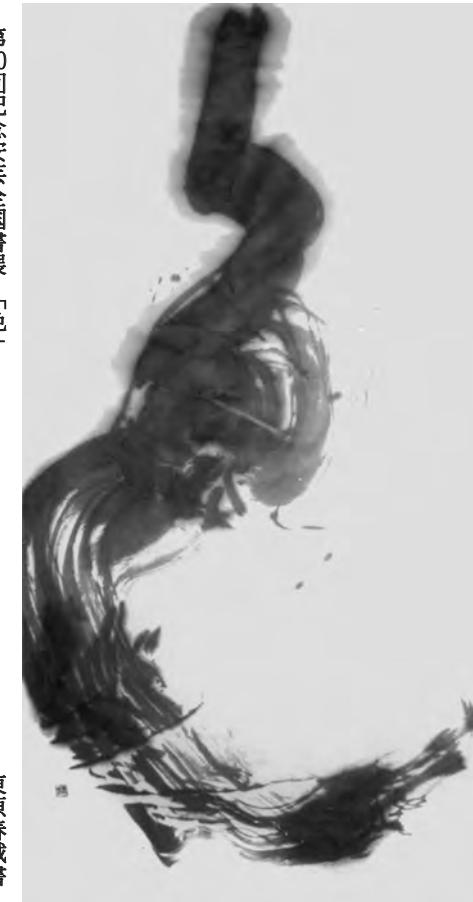
### 「思い出の言葉」

「令和の群像」の原稿依頼をいただいた時、年令を追いかける様に、前しかみなかつた自分が、タイムマシンにかけられました。昭和53年5月、縁あって今は玄遠社・春洋会の会長である小林琴水先生の紹介で、故

恩地春洋先生に出会いました。その月は『書道芸術』の漢字の課題が「愚公山移」でした。初めて私の半紙作品をみて「ほほ…大陸的な字だなあ」と一言。その一言で、後40年間書の道を続けることができました。

私は「満州生れの大陸育ち」。先生が他界されるまで、先生の足元でチョロくして

いる中で「点を書ける様になるには10年、線は点の集まり、黙って10年書けばなんとなく解ってくる。賢くなるなよ。賢い人はすぐやめる。やめたら〇や」と先生の蘊蓄のある言葉は今は懐かしい。又有る時は、世阿弥の「離見の見」「目前心後」など、私にとっては大変難しい意味の言葉を分かり易く解説して下さり、後に大字書の作品作りに心して聞いたものです。特に大字書は己の生活感、体力、思想、哲学、即ち人間性が如実に出るとのこと。他人の作品を羨望したり、形ばかりこだわった自分を反省しました。まさに「離見の見」、少し自分なりに解釈して作品作りしている今日この頃です。いつか心中から出てくる点と線を書ける様になりたいものです。



東原春城書

掲載作品「色」は、第30回記念安芸全国書展」で文部科学大臣賞を賜りました。この作品は筆おろしの1枚目の作品。後数10枚書きましたが、恩地先生がこれでいいとおっしゃった作品が大きな賞を賜り夢の様な一ページでした。

# 書のひろば

理事長 辻 元 大 雲

## 第71回毎日書道展会員賞 武山櫻子、千葉紅雪両氏に

5月鑑別、6月入賞審査を経て、7月3日会員賞選考、4日文部科学大臣賞選考と進み、7月10日～8月4日まで国立新美術館、18日～25日まで東京都美術館を会場に盛大に開催された。

会員賞には表記の通り本院より2名が受賞、計26名が栄誉に輝いた。毎日賞以下各賞は次号特集にてご確認いただきたい。入賞入選された方々に心よりお祝い申し上げたい。残念ながら賞外、また落選された方々には次回へ更なる挑戦を期待したい。

7月21日（日）午後より毎日書道展

全体の授賞式が東京パークタワー・プリンスホテルにて2500名余の参加者で盛大に開催され、式冒頭には毎日書道顕彰（田向良歌・宮本博志・東京都美術館）が贈呈された。

授賞式では文部科学大臣賞、会員賞など各賞が授与され、晴れやかな心温まる式であった。受賞者を代表しての謝辞を本院会員賞受賞の千葉紅雪さん

が、8年前宮城県石巻市、勤務校石巻高校にて東日本大震災に遭遇。ご自身の被災、救護活動の必死の身を挺しての経験を経て今日の書の活動、そして会員賞の栄誉をいただいたことへの感謝などを、切々と述べられ、会場の皆さん涙を誘った。素晴らしい心打つ謝辞であった。同じく会員賞の武山櫻子さんも宮城県気仙沼で家ごと被災に遭われた方である。お二人のご受賞は深く刻銘される慶事であった。

第71回毎日書道展会員賞・毎日賞受賞者の中から選考される訪中団員に、本院会員賞受賞者の千葉紅雪さんが団員として選考された。

団長は室井玄聰理事（創玄書道会理事長）、副団長には神田浩山漢字部審査会員、秘書長には毎日書道会堀内宏明総務部長、団員は計16名で全国各地から参加する。

8月29日～9月4日、コースは上海・西安・山東省萊州・曲阜等を巡る山登りで、楽しい旅となりそうである。一路平安をお祈りしたい。

## 書道芸術院秋季展企画「書道芸術院の書　かな、篆刻・刻字、前衛書」展



毎日書道展表彰式謝辞

ショップを土日中心に、国立新美にて5回開催する。お子様同伴参加で盛会であった。

## 第34回中国へ書の研修視察団 千葉紅雪さん参加

第71回毎日書道展会員賞・毎日賞受賞者の中から選考される訪中団員に、本院会員賞受賞者の千葉紅雪さんが団員として選考された。

小児がん撲滅チャリティ「谷村新司コンサート」盛會に

7月5日夕刻、東京渋谷オーチャードホールにて、ゲストにサラ・オレインさんが出演され素晴らしいコンサートであった。本年は美智子上皇后様がご臨席され、下谷洋子常務理事と共に上皇后様そばにて鑑賞させていただいだ。本院からも40名ほどが協力参加していただき感謝。毎日新聞社主催のこの事業は30年近く継続している。ご支援ご協力をお願いしたい。

## 慶祝「書道芸術」700号発行

院創立から10年を経て院活動の広報として、会員の資質向上を目指して発行された月刊競書雑誌「書道芸術」が今号をもって700号発行となつた。次ページに特別ページを編集したのでご高覧いただきたい。

篆刻刻字部後藤大峰、前衛書部金井如意・千葉蒼玄、幹部役員として辻元大雲・小竹石雲が担当した。

作品はあらかじめ希望サイズを申告、狙って形式サイズ指定とした。提出された作品はいずれも意欲溢れる作品であつたが、やや難点もありほぼ全員に再度挑戦していただくことになった。

夕刻5時から芝パークホテルにて書道芸術院出品者懇親会が200名余の参加をいただき開催、ご来賓を交え賑やかに行われた。2次会も40名余の参加、毎日書道会西村専務理事にもお出いでいただき感謝。

今回展では特別企画展は行われないが、七夕短冊や団扇に揮毫するワーク

昨年から始まつた秋季展新企画「書道芸術院の書」は、今回「かな、篆刻・刻字、前衛書」展として各部から選考をいたしました。中堅作家17名が出品する。

企画展の充実レベルアップを目指し、選抜作家より事前に作品をご提出いただいた、常務理事・所属理事による下見会を行つた。7月22日院事務所近くの会議室をお借りして、かな部下谷洋子、

院創立から10年を経て院活動の広報として、会員の資質向上を目指して発行された月刊競書雑誌「書道芸術」が今号をもって700号発行となつた。

次ページに特別ページを編集したのでご高覧いただきたい。

# 「書道芸術」700号発行を記念して

理事長 辻 元 大 雲

昭和22年11月創立、翌年第1回書道芸術院展を開催してより10年後、昭和32年12月1日に第1号「書道芸術」が発行された。全面朱色、シンプルな「書道芸術」のタイトルが斬新なイメージを発信した。

創刊の言葉は香川峰雲会長が「書道芸術発刊に際して」と題し高らかに述べられている。編集責任者は中島邑水先生。巻頭グラビアは木簡2種と蓬莱切、競書手本は楷書種谷扇舟、行書中島邑水西先生。山本聿水、和井田要西先生の前衛書と漢字二字の作品。

更に「この作品を取り上げる」は創刊以来競書作品より注目作を1~2点を取り上げ、評者は香川春蘭・中島邑水・武士桑風・種谷扇舟・満田礼子の諸先生によりかなり激しい作品論が戦わされた。

更に「近代詩文書は第一芸術か」=毎日書道展第四部(近代詩文作品)の問題点をさぐる、と題して武士桑風先生の主張が発表されている。

「古典の研究」千代倉櫻舟先生、「篆刻初步講座」伊東快堂先生、その他競書部門を合わせ表紙含め16頁であった。

編集者は

創刊~16号 中島邑水

17号~33号 香川峰雲

34号~47号 種谷扇舟

47号~587号 恩地春洋

588号~700号 辻元大雲

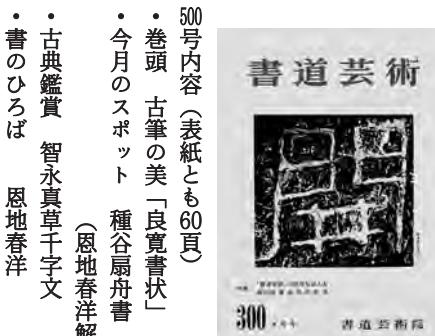
以下いくつかの記念号の内容を抜粋する。



300号内容 (表紙とも52頁)

・古典鑑賞 開通褒斜道刻石

山本聿水



500号内容 (表紙とも60頁)

・卷頭 古筆の美「良寔書状」  
(恩地春洋解説)

・今月のスポット 種谷扇舟書  
・古典鑑賞 智永真草千字文

・書のひろば 恩地春洋  
・種谷扇舟米寿個展 浜田一堂

・新審査会員紹介  
・21世紀の書=私の主張



このように号を重ねることに内容も充実、ページ数も増えていったことがお分かりになると思う。

次ページに創刊号「書道芸術発刊に際して」香川峰雲先生の発刊の辞を復刻掲載する。ご一読を。

漢字規定 (3段以上) 恩地春洋

雁塔聖教序

漢字規定 (初段以上) 三宅素峰

条幅規定 (秀級以下) 飯高和子

かな規定 (秀級以下) 大内魯邦

かな規定 (初段以上) 小竹石雲

かな規定 (秀級以下) 西岡楚峰

かな規定 (秀級以下) 高橋松延

ペン字規定 斎藤雨城

私の考える現代書入門 前衛書

同 現代詩文書 山田魯江

刻字講座 小山鳳来

300号を迎えて 14名による寄稿

第36回書道芸術院展入賞者紹介

書壇往来 種谷扇舟

その他競書成績など

漢字規定 (初段以上) 辻元大雲

漢字規定 (秀級以下) 高橋百谷

漢字規定 (秀級以下) 朝倉春江

漢字規定 (秀級以下) 奥田瑞舟

条幅規定 (初段以上) 小竹石雲

条幅規定 (秀級以下) 半田藤扇

ペン字 半田藤扇

今月のホープなど競書成績

・古典鑑賞 柿原春岱

・書のひろば 恩地春洋

・種谷扇舟米寿個展 浜田一堂

書話シリーズ 平川峰子・三浦鄭街

500号記念特集 恩地春洋

記念座談会 恩地春洋、香川倫子

小伏竹村、浜田一堂、村野大仙

辻元大雲、小竹石雲、小浜大明

小林琴水、嵯峨大拙、柳原春岱

下谷洋子、種谷萬城 (司会)

書道芸術院史 恩地春洋

特別寄稿 池田遊子、和田清香

古橋飛山、新井京華、石川六風

塚根東翠

朝倉春江

高橋百谷

奥田瑞舟

小竹石雲

半田藤扇

柿原春岱

今月のホープなど競書成績

・古典鑑賞 柿原春岱

・書のひろば 恩地春洋

・種谷扇舟米寿個展 浜田一堂

・新審査会員紹介

・21世紀の書=私の主張

# 『書道藝術』発刊に際して

香 川 峰 雲

る実状において創刊される。これも奇しき縁で、今日話題になつてゐる、墨象とか保守とかで論争に時をついやす時ではないようである。

戦後わが国の藝術美術活動が復活しはじめすでに十二年を経た。十年一昔、その間それぞれ各方面の関係者は筆舌に尽せない辛苦をなめたものである。それは一書道界のみではなく、絵画、彫刻、演劇、建築その他すべて同様であろう。

辛苦の賜ものかどうかわからないが、美術が、戦前戦後を通じて今日ほど、一般社会に理解されようとしている時はないであろう。それほどわれわれの生活に、明るさと楽しみをもたらし、少しでも心にゆとりと豊さを感じさせるようになったことは、関係者達に対し、大いにその功を称えてしかるべきである。

しかしながら、俗説に調子の良い時こそ自重するように教えている。ことの真綱は別として、せつかくの功も称えてばかりいられない問題が発生したことである。その問題というのは、すでご承知の今年初夏国会の文教委員会で取り上げた、日展問題である。日展が今日日本本の美術の代表であるかないかは別として、文教委が何故取り上げたかである。まさか相撲協会の件で味をしみたからであるまい。ご存じの如く日展といえば、一般事情にうとい大衆は官展と誤認したり、また最も権威のある展覧会と信じてゐる、これら大衆は日展の外に上野

美術館で毎年開かれている大小八十団体の展覧会が催されているということも、あまり知らない一般ではなかろうか。これはあながち低俗なジャーナリズムの罪ばかりではあるまい。

国会で社会党の政治的立場から、最も大多数の国民に

関係があらうと思われる日展問題に手をつけた文教委員会は、前述のような状態からすれば正に国民の期待に応えたというところであろう。今夏は工芸その他についてあつたが、今秋になつて遂に書道部門に火が付くのではないかと、関係者を憂慮させている。そこで一体書道（第五科）でどのような問題が、どんな形で露呈するかだ、書作家の一員である筆者にしても、第五科においては遂に問題になる何物もない、という結論を期待するものであるが、消息通の言葉は、必ずしも樂觀をゆるさない状態ということである。

その後の動きについて聞くところによると、高津議員のみでなく、新たに二議員が応援に加わり準備おさおさおこたりなしと聞いては、これは尋常一様には済むまいということになりそうだ。

こういう、すでに書道界に風雲が捲き起つてゐる今日本誌『書道藝術』はすべての点において微妙な立場にある。本誌『書道藝術』は勿論、他のいかなる書道団体とも從来通り友交関係を持続し、文化の向上に尽すことは目的の一つであるが、最近しばしば書道藝術院が機関誌を持たざる結果生じる悲哀を、しみじみと痛感した。われわれの団体が正しいと思う主張を、行動を、広く理解していただくために、会員の相互の親睦をはかるため、にそうして日本書道の向上発展を具体的に進めるために発刊したものである。

本誌の企画は、すでに本年二月幹部の発案により、会員、関係者に広く意見を求め、着々準備中であつたが、

初夏以来諸般の事情により今日まで発刊が遅延し、期待されていた諸氏に対し、まことに申訳ない次第であつたが、幸い今日事情も好転し、ここに創刊号をおくることになつた。会員はもとより、一般書道愛好家にも広く門戸を開き、ともども研鑽し、この道にそして現代に生きるという自覚をもつた書活動をすすめていきたい。そのためには一党一派に偏することは厳に慎み、他からの正しい批判に対しても、気持よく、そして明るくこれを受け入れ、また会員の建設的意見は本誌編集に充分活用させていただき、余員諸氏が、自分の機関誌という深いつながりと、愛情をもつて、育てていつていただきたい。それが本誌の伸る大きな要素である。諸氏の絶大なるご支援を期待し、発刊の言葉をおわる。

## 漢字(五)

### 最首翠風

古典から学んだもの

顏真卿の『争座位稿』からは藏峰の強さ、豊かさを学んだ。

高校時代に出会った『雁塔聖教序』は新鮮だった。現代の若い子

流に言えば「こんな細い線アリ?」

だ。しかも線に筆圧の変化が見られ、強靭である。中学校時代まで

掘されていないが漢代の肉筆を臨書していると石刻と異なりその時

管を立てて筆鋒の腰の弾力を生かす。筆圧の変化による線の面白さ。

代に生きる人間の思つかいが手に伝わって来た。

これまで出会ったことのない『書』

掲出作は31震災直後の毎日展作品。祈りの心から発した語句であ

クだった。高校2年の夏休みを使って全臨した。大学の授業で学んだ

を選ばせた。



第63回毎日書道展

## 現代詩文書(五)

### 大隅晃弘

本院の称する現代詩文書は、高校芸術科書道で「漢字仮名交じり書」と言われる。端的に漢字と仮名が混在する書という意味合いが含まれているのだろうか。毎日書道展では近代以降の詩文書を素材

とすることから「近代詩文書」、日展では漢字と仮名の調和に視点を置いた「調和体」と称している。他にも「新書芸」や「新和様体」等、各団体展での名称は統一されていながら現状だ。

しかし、異なる名称の下に潜在化している本質は、何を書き如何に表現するかという、書き手の主体性だ。書き手不在の中で、何をどう書くかが予め規定されているのは何とも不思議な仕組みだ。

素材となる誰もが読めて理解できる言葉を、筆・墨・紙などの限られた道具立てで表現する書作活動は、他の芸術表現と比較してみても、一定の厳しいルールが課せられていると言つてよいだろう。

師弟関係によって書の基本が培われ、作品の見方や制作手法などが広く弟子に伝承されれば、酷似する同傾向の作品が生まれ溢れても仕方ない。その傾向に擬態化することが公募展での豪賞条件と誤解されれば、書き手の顔が見えない空虚な作品が、公募展の壁面を埋め尽くすだろう。

こうした、書の持つタイトな特性を踏まえれば、書き手の確かな根拠に基づいた、意欲溢れる創意工夫が一層尊重されなければならぬ。



大隅晃弘書

第54回毎日書道展 每日賞

# 令和元年度 新審査会員作品

市川 紫泉（現）・嶋 由香（前）・青木 藤漣（運）・旭 筝陽（漢）



青木  
藤漣  
(千葉)

「身閑夢亦安」

もくせい会に入り10余年。

半田藤扇先生はじめ諸先生方の  
ご指導と、よき仲間に育ま  
れ、この度審査会員にご推挙  
戴き有難うございました。  
身に余る思いと共に、身閑  
かに一筆自在の夢には未だ道  
遠しと痛感しております。今  
後とも諦めず修行一生と日々  
研鑽を重ねてまいります。

（藤漣）



旭  
筝陽  
(大阪)

「動」

この度は、審査会員に昇格  
させて頂きありがとうございます。  
ます。日頃より、小林琴水先  
生はじめ、春洋会の諸先生方  
のご指導と激励のおかげと感  
謝しております。環境が一転  
し、新たに勉強するきっかけ  
を与えて頂けたと喜んでし  
て書きました。少しずつ、前進  
していけたらと思います。

（筝陽）



「小林千江子の句」

この度は、審査会員にご推挙頂きましたがどうぞ  
ありがとうございます。坂本素雪先生、  
伊呂波書の会、書友の皆様のご指導に  
深く感謝申し上げます。風景、情景が  
浮かぶような作品を目指に一層精進し  
てまいりたいと思います。

（紫泉）



嶋  
由香  
(富山)

「絲」

この度は、審査会員にご推  
挙戴きましたがどうぞ  
ありがとうございます。温かくご指導下さる浜  
谷芳仙先生・田守光昭先生・書  
径舎の皆様に感謝申し上げま  
す。

長鋒筆で戸惑いながら、書  
線、イメージに取り組んでみ  
ました。古典を大切にし、臨  
書に心を潜める幸せを思い、  
感謝と共に一層精進して参り  
ます。

（由香）



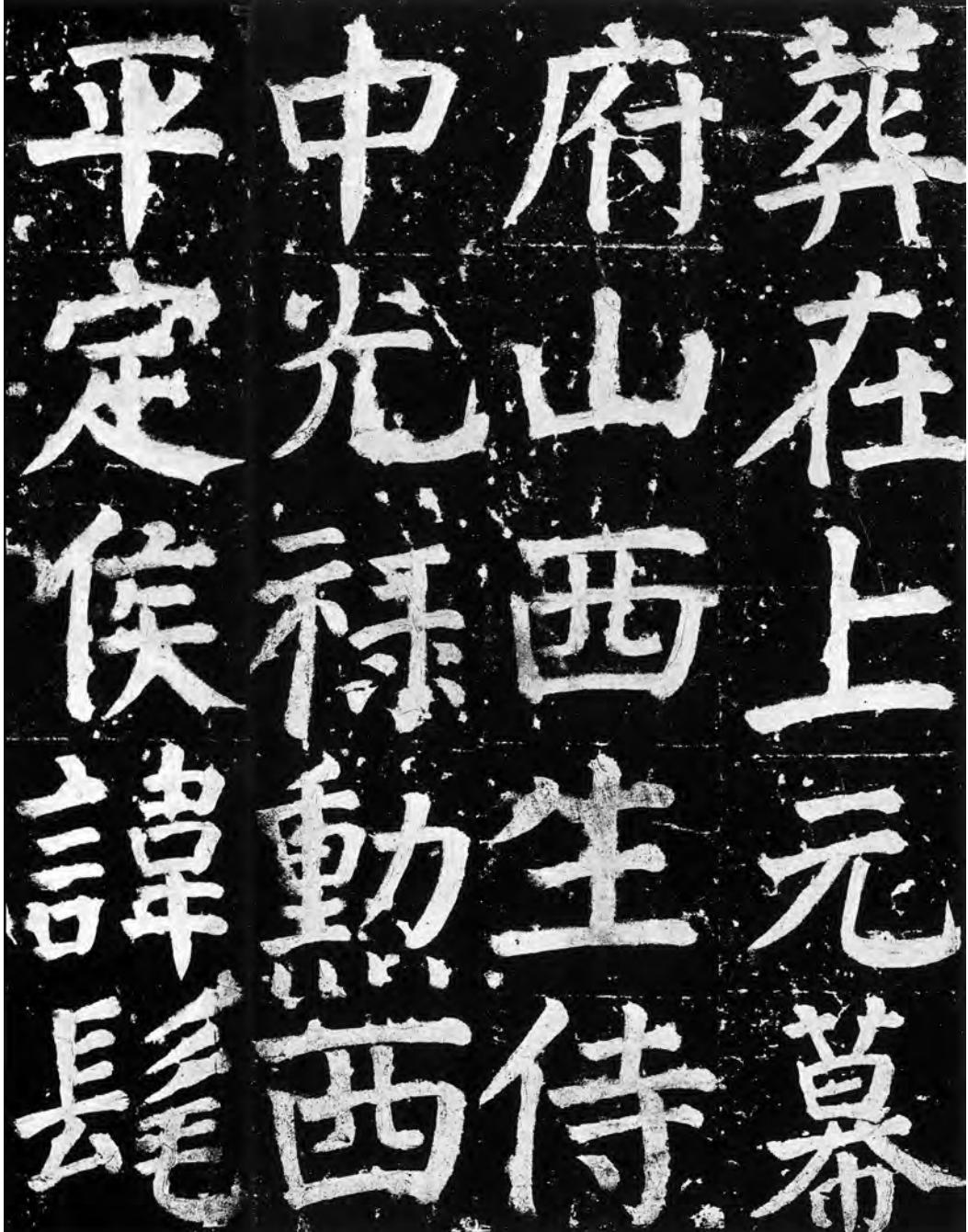
顏氏家廟碑（唐）顏真卿②

漢字研究部臨書課題

（半紙普通判・縦使用）左記の法帖より何文字臨書してもよい。

特別研究部臨書課題

（毎日展公募サイズ以内・縦横自由）当該古典の左記掲載部分以外も可。



〈解説〉

顏真卿の楷書の書法を「颜法」といい、篆書の筆法を基調とした直筆藏鋒の颜真卿特有的書法である。颜真卿の書風は、向勢（相対する二本の縦画の中ほどが外側に膨らむ字形）・丸みを帯びた起筆・胴張りの線・右払いの收筆の割れ・水平に構えた横画・点画の組み合わせなど、さまざまな特徴をもっており、点画は自然に丸みを帯びて、やわらかく奥行きのある重厚な線質を生みだしている。また「蚕頭燕尾」とは、点画の起筆で筆先を蚕の頭のように丸め、收筆を一度押さえてから筆を上げて払うので尾が二つに割れた燕の尾のようになることをいう。「蚕頭燕尾」の書法は颜法の特徴の一つで、颜氏家廟碑にもっともよく現われている。

※掲載図版70%縮小

(編集部)

※落款を必ず入れる。署名、もしくは〇〇臨（押印のみも可）

かな研究部臨書課題

(半紙普通判) (料紙可)・縦長に使用)

別紙を裁断して貼付も可。半懐紙は半紙サイズに切って使用のこと。  
左記の古筆の掲載部分より歌一首以上を書く。(全臨も可)

特別研究部臨書課題

毎日展公募サイズ以内・縦横自由 上記の掲載以外も可。

（よみ）  
日者  
選尔  
那  
万

ふ心ぞわびしかりける 布所利希流  
おこひはしらぬ山ちにあらなくにま  
しる者多も くにならぬみだ多  
志ら多萬と見えしなみだも 利礼  
にはたのとのみこそいろまさりけれ 万利  
に小けり としふればかられなるのうつろひ 那  
風ふけばみねにわかるよしらくもの 多能見年  
たえてつれなき人の心か 司可流 能見年  
多衣年尔 た(だ)みね  
不介 た多能見年  
ければみねにわかるよしらくもの 多能見年  
たえてつれなき人の心か 司可流 能見年

〈解説〉本阿弥切は字粒は小さいながら、筆の弾力を最大限に利用した变幻自在でリズミカルな筆線を用いて書写されている。平安時代特有の優美さを湛えるとともに、運しさをも窺わせる。

料紙は、中國から渡ってきた唐紙を用い、白、縹（薄い藍色）・茶などの具引き（貝殻を焼いたものの粉末の胡粉、またはこれに顔料を加えたものを刷毛で紙面に塗る引き染めのこと）を施した上に、雲母で唐草・雲鶴・夾竹桃などの文様を摺り出したものである。縹16.7cm、横28cmの小さな料紙で、巻第16を除くと、各巻ごとに同じ色・同じ文様で統一されているところが本阿弥切の特徴である。

(京都国立博物館藏)

(※掲載図版は原寸)

(編集部)

\*落款を必ず入れる。署名、もしくは〇〇臨（押印のみ也可）

種谷萬城



來者猶可追 よみ（来る者は猶お追うべし）

書体＝自由



萬城書

未来のことは追っかけて、どうにでもすることができる。  
今月は、波磔のある隸書「八分」で書きました。隸書は篆書の点画を直線化・簡略化し、漢代に正式書体として定着します。起筆は藏鋒で、收筆に波勢があり、特に波磔に装飾的な筆法が見られます。横広の字形、水平・等間隔の横画、転折部では筆を一度引き抜き、改めて藏鋒で入筆します。左の作は漢簡を参考に変化を加えました。漢碑・漢簡の名品を臨書し、様々な隸書を学びましょう。

來者猶可追 微子『論語』  
(来る者は猶お追うべし)

習い方解説(五)

小竹石雲

手和筆調  
(手和ぎ筆調う)

大自然の中で悠然として、そして堂々と主張しつづけている鄭道昭の雰囲気で書いてみました。なかでも鄭羲下碑は、清の包世臣によると「篆勢(篆書の韻致)草情(草書の筆勢)分韻(隸書の韻致)草情(草書の情趣)畢く其の中に具う」と評されています。

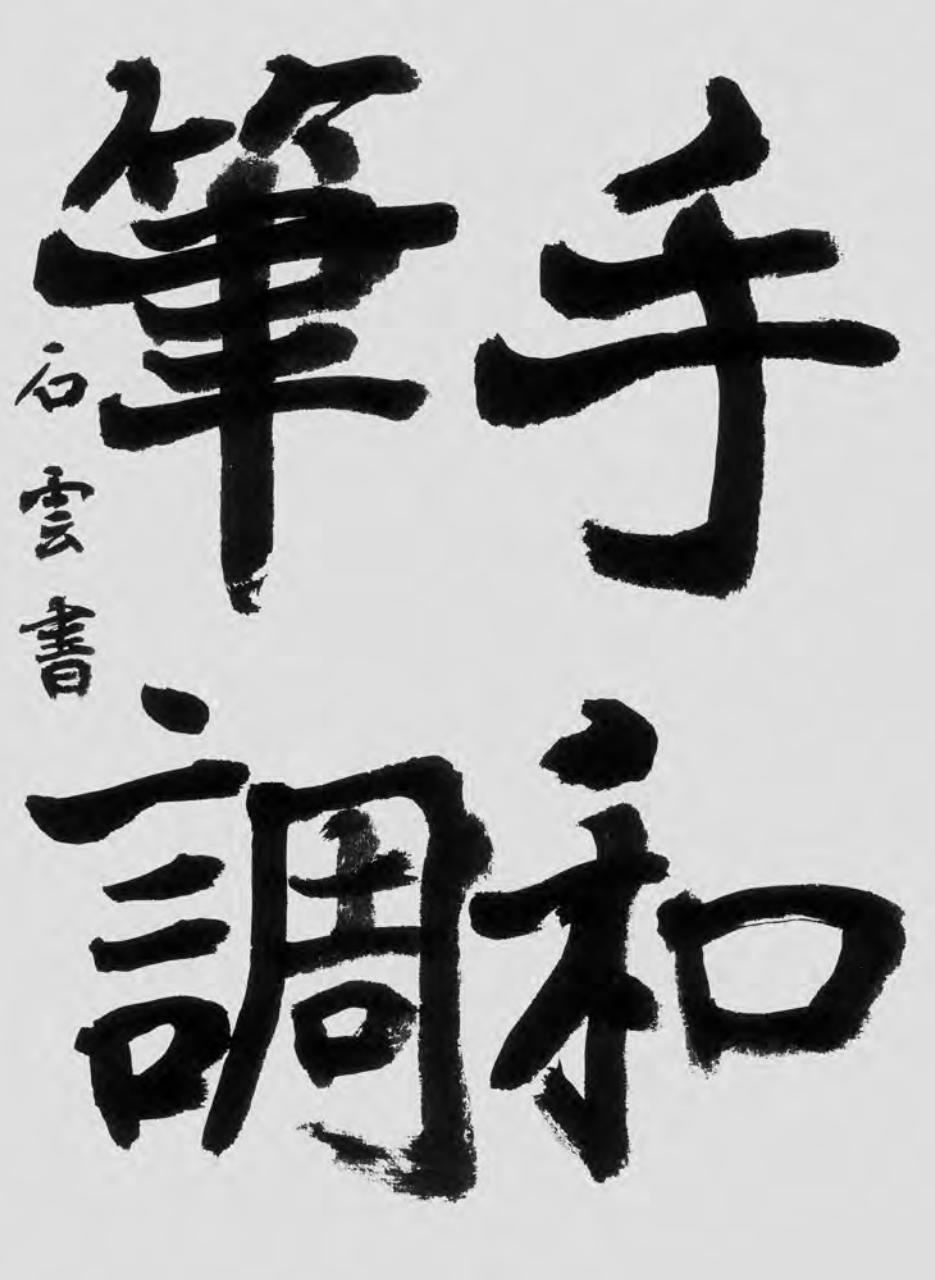
具体的な用筆は直筆、藏鋒で書きることが基本形です、その上で左記のことにつけて書いてみましょう。

- ・起筆は縦画、横画共に藏鋒で入り送筆部分ではゆるやかなうねり、粘りが特徴です。
- ・転折は懷を広くとり、広く空気を孕み、雄大感をもたらせる。
- ・払いは伸びやかで開放感を感じられます。

運筆の呼吸が長くなる練習が一番大切なように思います。

手和筆調 よみ(手和ぎ筆調う)

書体=楷書



かな規定 初段以上【九月十五日締めきり】用紙 半紙普通判(料紙可) 奥田瑞舟選書

### 習い方解説 (二)

旅人の鳴らして行くや迎ひ鐘  
(小林一茶)

旅人の

鳴らして  
行くや

迎ひ

鐘  
一茶句

創作

※迎鐘(むかへがね)  
8月7日から十日まで、京都東山の六道珍皇寺で行われる盆の精靈迎えの行事。

よみ方 旅人の鳴らして行く(久)や迎ひ鐘 一茶句

俳句を書く時は、少し大きめの筆が良いです。いたち毛の長さ2.5センチの筆を使いました。

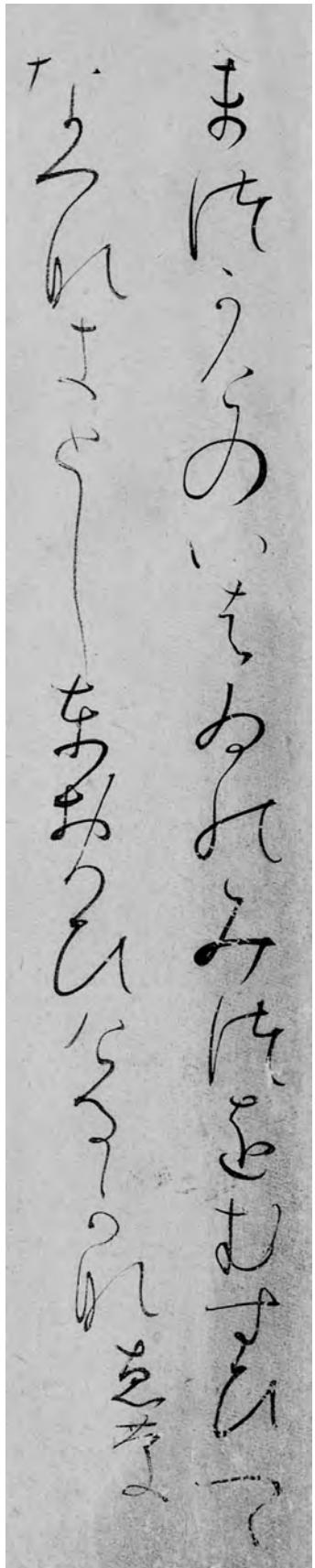
漢字かなもほぼ原文通りで、文字数が少なくなりました。大胆な暢びやかな線、文字の大小を考慮した立体的な線で、貧相にならないよう工夫して下さい。

先月号に続き、連綿線の大切な役割を書きます。文字と文字を繋ぐだけの意志のない線の多用は、煩雑なだけです。連綿線でふんわり長くして余白を作る、また短く強い線で密部を表現する。この線の変化で行のゆれが生まれます。放ち書きでの余白の美しさも加わり、直立した行でなく、自然な流れの作品になれば成功です。

かな規定秀級以下【九月十五日締めきり】用紙半紙タテ $\frac{1}{2}$ 〔料紙可〕(たて32センチ・よこ12センチ)

掲載写真の和歌を臨書する。または部分（2字以上の連綿または単体を含む）を臨書する。

粘葉本和漢朗詠集  
(掲載写真拡大120%)



よみ方 まつ(徒)か(可)げ(介)のいは(者)るの(能)みづ(徒)をむすびつゝ

なつな(那)き(支)としと(東)おも(无)ひけ(介)るか(可)な(那)恵慶

習い方解説(二)

小島孝子

我がやどに鳴きしかりかね雲の上に  
今夜鳴くなり國へかも行く

万葉集(作者未詳)

かな条幅規定【九月十五日締め切り】用紙 小画仙紙半切（料紙可）

小島孝予選書

散らし書きには様々な形がありますが、基本的な3行書きで表現しました。2行目を1行目に少し寄せることで、行の響き合いと共に全体の行間が変化し余白に動きを与えます。また、漢字をかなに置き換えて連続することによって、美しく伸びやかな流れが生まれます。余白が活きる文字の配置を考慮し品よく流麗な作品を創作します。

み方 我(わ)が(可)やどに(一)鳴きし(志)かり(雁)が(可)ね(年)雲(くも)の(能)上(うへ)に(耳)  
こよ。 今夜(古与日)鳴(奈)くな(奈)り(利)国へかも(裳)行(ゆ)く

創作

漢字条幅規定 初段以上 【九月十五日締めきり】 用紙 小画仙紙半切

名越蒼竹選書

### 習い方解説 (五)

名 越 蒼 竹



山僧對堯坐 局上竹陰清 映竹無人見 時聞下子聲  
(山僧)に對して坐す 局上竹陰清し 竹に映じて人の見る無く 時に聞く子を下す聲)

書体=自由



漢字条幅規定 秀級以下 【九月十五日締めきり】 用紙 小画仙紙半切

半田藤扇選書

### 習い方解説 (五)

半 田 藤 扇

行書の表現に挑戦です。美しい流れは、大変好感度が大ですが、ややもすると表現が甘くなりがちに。線の太細、文字の大小の変化に心がけてみて下さい。更に潤滑の変化が加わると美しさは倍増となります。

ゆったりとした気持ちで書作してみましょう。羊毛筆を使用しました。

少し字数を増やしました。字間は当然詰んできますが、平均化は避けましょう。字間をうんと詰めたり、時間を開けたりして、文書群を作るとよいでしょう。疎密の変化と行と行の響き合いを大切にしてその上で行間が美しければ成功です。文字の大小変化を一層強くして、思いっきりつぶした文字を交えると効果的だと思います。

\*タテ形式に限る

夕陽千樹鳥聲寂涼 月一庭花影深  
(夕陽千樹鳥声寂たり 涼月一庭花影深し)

書体=自由

川村美泉

あたまを雲の上に出し

四方の山を見おろして

かみなく下まを下に聞く

富士は日本一つの山

唱歌　ふじの山　美泉書

青い空、照りつける太陽、入道雲…令和  
の夏がやってきました。

子供の頃、近所の子どもたちと空を見上げ、大きな声で歌っていた歌が、この「ふじの山」。写真でしか見ることのないその雄姿は、私達にとって憧れの存在でした。

さて、今回もひらがなが多い課題です。漢字の字形をまとめることには比較的慣れている私達ですが、文章の中にひらがなが続くとまとめていくと感じる方もいらっしゃるのではないかでしょうか。「書写」の正しく整った字形、また仮名の名跡のやわらかな字形など、さまざまな美しいひらがなの形を学び、ペンの弾力を生かして、息の長い作品を書いてみましょう。

※落款(自分の名前)を必ず入れる。

用紙=はがきの大きさ(14.8×10cm)、白色のもの、黒インク使用のこと

書体=自由

今月の

ホープ作品  
各部総評 No. 698

ベン字部 師範 菅家 淑美  
漢字とかなの絶妙なるデフォルメ、豊かなペン線の強弱とリズム、まさに優雅で品格ある作品。

◎ベン字部総評 今回の課題となつた連綿の適度なスピードとリズムをよく学び、品よく流れのある作品が多かった。(孝子評)

我は海の子 向浪の  
やわぐらぎの松原に  
煙たかひくともや、  
我がたかきよ、往家だれ  
唱歌 我は海の子 沢美書道

漢字条幅部 師範 仲澤 黄翠  
北魏造像記の風を得て、堂々充実の作。搖るぎない運筆と力強いリズムが観者を魅きつける。

◎漢字条幅部 総評 書体書風自由な表現で挑める条幅部門は、基礎的基本の技術を鍛磨する好機会である。更なる挑戦を期待。(大雪評)

西向輪臺萬里餘也  
知鄉信日應跋 翁翠書

前衛書部 特選 重村 恵月  
強靭な右部と全体にゆったり引いた曲線部が響き合い大きな世界となる。

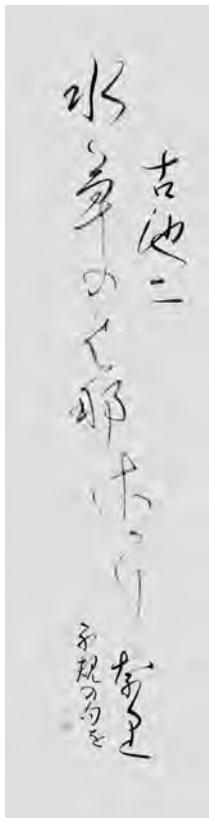
◎前衛書部総評 モチーフの掘り起こしに成功した作品が多く嬉しく思います。さらに前進を。(慧香評)



現代詩文書部 特選 相内 沙莉

超長峰の凜とした運筆と流れのある構成。特に「銀の波」は、神秘的な魅力にあふれている。

◎現代詩文書部総評 全体としては線質が多彩で楽しめる。淡墨の墨色一考を要す。(掃雪評)



かな条幅部 師範 真下美佐代  
淡く美しい色の紙にふさわしいしなやかな線質に引きつけられる。作者の心の深さが伺われる秀作。

◎かな条幅部総評 字粒過多、墨量过多で流れを損なっている作多く残念。紙面のバランスの美しさを考慮し控えめな表現を。(明子評)

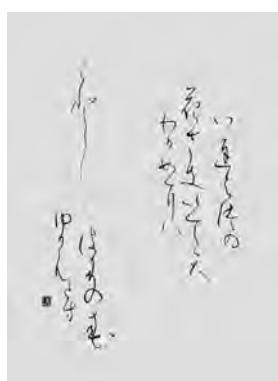


漢字部 師範 奥川 麗流

筆法が爽快としていて、筆路も明快。線が冴え切って、心が引き締まり心地良い。習練の成果です。

◎漢字部総評 上級は草書作品が多く、流暢な線の美しい作が目に付いた。来と成、雨と而など草書

で誤り易い。要注意。(萬城評)



かな部 師範 宇田川春華  
穂先を生かし切れのよい線がありミカルに流れる。料紙の色彩や図柄に墨色や動きが寄り添い秀逸。一行、そして全体とバランスの取り方に考慮した様子。連綿が続く時は、先ず正確な文字把握をしましょう。(洋子評)  
◎かな部総評 一行、そして全体と、バランスの取り方に考慮した様子。連綿が続く時は、先ず正確な文字把握をしましょう。(洋子評)

今月の

# 特別研究部優秀作品(特選)

選評 辻元大雲 最首翠風 山口仙草 奥田瑞舟



江本興舟書

175×52.5cm

臨書 (大雲) 江本興舟 「魏靈藏造像記」

◆切れ味鋭い充実した書線でまとめた。上下の響き合いが見事で、余白も美しい。作品の汚れ注意。

(翠風評)

◆黒はあく迄も黒く白はあく迄も白くシャープな線と構図に無駄のないモダンさを堪能しました。

(瑞舟評)

◆切れ味鋭い充実した書線でまとめた。上下の響き合いが見事で、余白も美しい。作品の汚れ注意。

(仙草評)

◆星。大宇宙に鋭く輝く光線。空気を切り裂くような迫力を感じました。

(大雲評)

◆鋭い切れ味の筆線が鮮烈な響きを感じさせてくれる快作。白と黒とのコントラストが美しい。

(瑞舟評)



140×60cm

前衛書 (白珠) 相内珠莉 「七夕」

◆素朴、豪快な原碑の特長をよくとらえ、ダイナミックな作。

◆太く重厚な書線で統一され力量のある充実した作。さらに線に鋭さがほしい。

(仙草評)

◆柔毫、濃墨による重厚な線が魏靈藏造像記の美しさ、味わいを表現した。大字ならではの演出が成功。

現代詩文書 (八戸) 市川紫泉 「増谷佳子の歌」



60×180cm

市川紫泉書

◆短歌一首をリズム感よく横展開した作。潤筆部がコアとなつて紙面を引き締めている。

(大雲評)

◆横形式を統御して構図、線とも心憎いばかりである。スタート、終結部の抑制した表現を学びたい。

(翠風評)

◆文字の大小、潤渴の変化が紙面に動きを与えている。余白も効果的に配し、横形式の空間処理も見事。

◆文字の大小、潤渴の変化が紙面に動きを与えている。余白も効果的に配し、横形式の空間処理も見事。

◆白に墨鮮やかに、文字の大小、潤渴の工夫、明るい紙面構成、後半の細字も効果的です。

(瑞舟評)

(仙草評)

◆迫力のある筆勢が随所に見られる。はげしく入筆、筆圧を加えながらの送筆に少し力抜けた

◆柔毫、濃墨による重厚な線が魏靈藏造像記の美しさ、味わいを表現した。大字ならではの演出が成功。

(翠風評)

(瑞舟評)



選評 稲垣小燕

今月のホープ作品



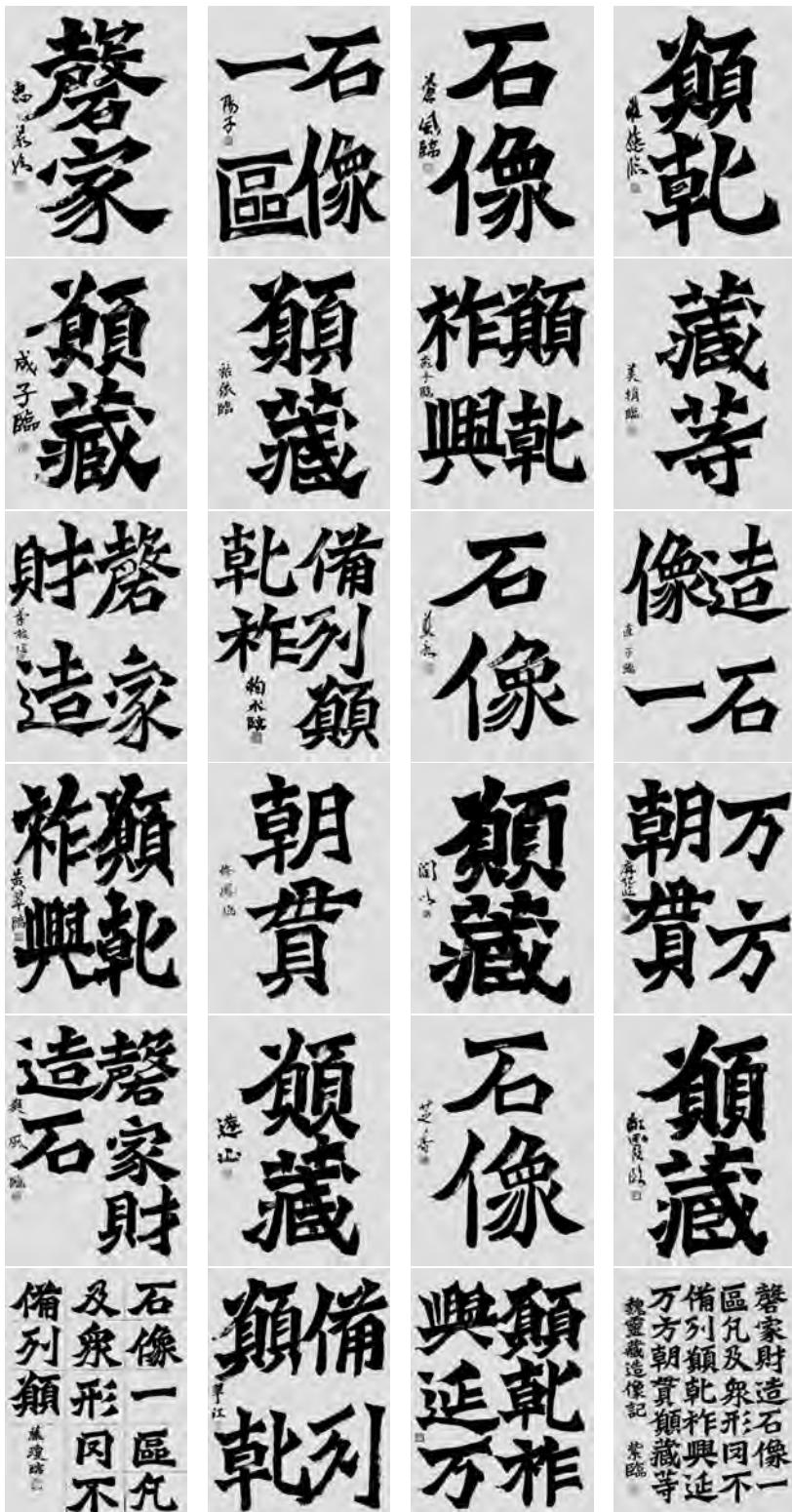
島 貢 琴 煉

漢字研究部 特選 島 貢 琴 煉  
造像記の厳正な字形の特徴をよく捉え、閑達で豊かな線質の堂々とした作品です。運筆の速度に変化をつけるとより一層線質に深みが増して躍動感のある響きの高い作品になるでしょう。

◎漢字研究部総評

魏靈藏造像記は、転折が右に迫り上がり、横画は入筆、收筆ともに筆先を利かせた鋭敏

な線質が特徴です。一見して学び易く思われますが、原帖をよく観察すると筆使いが微妙に変化していることがわかります。出品作品の中には字形だけを真似た作品が多く見受けられたことは残念に思います。臨書するにあたっては、まずは形、特徴をよく捉え、その上で線質を極めていくことが大事です。



藤爽黄菊成惠  
瓊風翠枝子泉

翠遊修絢祐陽  
江山鳳水依子

百芝藍桃蒼潤  
雲香水子風

紅ま直美雅  
紫霞き子梢悠

石像一區允  
及衆形因不  
備列顛  
蓋瓊瑞

石像一區允  
及衆形因不  
備列顛  
蓋瓊瑞

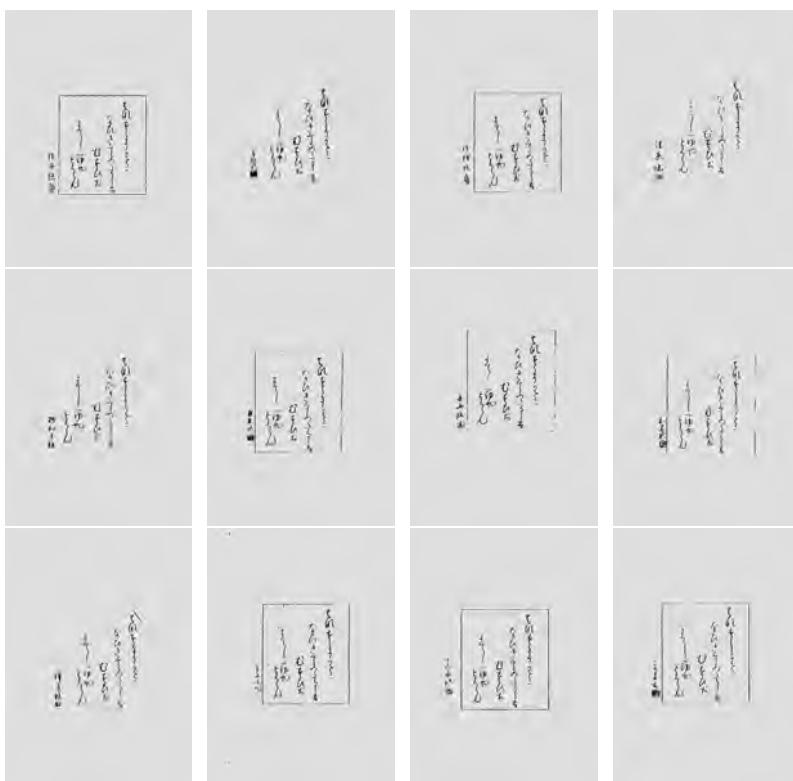
石像一區允  
及衆形因不  
備列顛  
蓋瓊瑞

磬家財造石像一  
區允及衆形因不  
備列顛  
蓋瓊瑞  
萬方朝貢顛藏等  
魏靈藏造像記  
蓋瓊瑞

かな研究部  
(升色紙)

選評 松村くに子

今月のホープ作品



洋紗信  
和  
子子子

良雅与  
林  
泉泉子

と香清  
み  
舟耀

か和佳  
つ  
子子恵



茂木絢水

◎かな研究部總評 太く濃い線と細い線の対比が、見事な立体感を醸し出している。また、字形も古筆の特徴を正確に捉え、日頃の鍛錬がうかがえます。先ず、枠を入れてから書くのが望ましい。

かな研究部成績表

かな研究部	特選	茂木絢水
洋紗信 和 子子子	良雅与 林 泉泉子	と香清 み 舟耀
か和佳 つ 子子恵		
秀	秀	
梅岩飯飯安新青 津瀬高島藤井木 佳代祥幹律裕藤玉 子園生子雪枝	石天渡 習璋辺 松中大吟木山前小井庄伊原石山池後高嶋根須磯平境苗茂 丸里沢尾村本川峰上司藤島川中田藤橋岸田貝山野代木 か 美 紗 与 と か 愛星淳は順梅瑛加芝詠寿春洋和信良雅赤み香清つ和佳絢 石子る子香仙子雲艸子汀子子泉子舟羅子蕙水	A紅有斐A颶竜明水紅大椿清桜宗 瑤秋明I菱泉溟海瑞翠月草苑 特選
澄春佳	如明琇硯千高有長上東玉耕春た大書澄黎た光大澄八京清た立東大孫書玄椿 月漢韻水葉崎秋月泉向松雲汀か雲泉春明か彩雲春街橋月か精向雲韻游穹翠	
阿作天坊洗草	綿吉吉宮松松福原早畠長土渡樋種高高鈴猿櫻驚齋近小小菊菅河加小尾大 貫田川澤重浦田澤部山谷井子泉田橋木渡田山藤藤林地野合納寺等 千川智鶴幸草翠玉流典 芝千弘紀雪雅由幸姫簞龍美翠桂松嘉晃白静和順よ紅昌 子子惠秋景江源子朗香峰枝子薹雲利苑凜右貞梢香子春江代雅代敬子こ霞子	
仙台松瑤陵入	正昆こ京昌高椿前京た青上大も高や琇天童 華陽だ橋苑真翠橋橋か蓮泉阪く真ま韻泉 氣原漢華水音ま原阪原雲中華葉鼎阪蓮華村井I華賓新	土竹明正硯潮や蒼大樹大附正千蘭大青正松高A正久日堺岩大水椿 沼阪海翠
熱青青藍會海木木澤木	鷺米吉吉山安春浜沼中中戸鶴田竹田泉鈴杉代島柴佐齋斎後紹高國木菊川鎌小岡大樺生鶴岩石石生飯安 沼倉野田岸嶋山岡野田村西部淵内口木田田田々藤藤田野武峰原地崎治野田崎田方澤橋田崎駒泉藤美 眞眞シ 美香 外木 か	川
桃松葵白勇月郷月介	将和彩佑翠余糸勝聯永奎ゲ恵藤亞哲智代龍利祥葉美洋雅杏つ舞喜遊玄琴輝泰優俊朱麻香和美李祥嘉悦正萩洋代 太枝祥子綾美子春薹心子風希子子宝子風子子芳邑え夢萩山城翠子峰子亮星美総子名苑子子花子子花子	由
青白秀宮	富高誠八松正秀桜声八春薰英芳蒼高大春こ墨若大高生伏華梓土大こ華樹青大白黎も梅白高澄土澄八誠正菊華 峰露水城	川
平春沙鈴菅神新築七鹿椎澤笹佐佐坂齊込小小小小工草北北岸柳菊川金加加葛鹿小乙小コ大梅宇曰植井石新知	原川木木原宮谷田條名田野々木本藤藤山林原島口藤刈村又地元崎岡藤藤島野櫻田部西木山田井ノ崎川井海	川
杏慶洋昌玉翠美裕志幸光範德美淳里早江美武萩馨み智山眞欣春民恵茱一萩翠雅恵裕萩智愛藤一步久春綾紅春甘津津惠和 華子子恵心子枝子子美江子子子子惠子美苗彩尚江子子華子峠子水仙人美陽芳美子光美実瓊美佳子華乃雨紅春雨子子舟	川	高草木千代子

芳こ書東、華高竹桜松春中大墨桜白長澄上大前白澄長芳蘭正玉白高白北澄泉水一大天小秀白A泉秀玉若青書旭  
選蘭だ遊伯仙崎美草村汀川雲宣草露月春泉雲霧春月蘭鼎華松露波珠原春会塗草雲霧映水嶺I会敵松真川松峰游老泉  
外147渡吉遊山山柳矢八守茂富三三真松松増増本堀別古深平林林橋野丹西仁浪永永中中中豊富富寺辻筑田武高高高高  
名邊野佐本口瀬木友木友木浦庭木本村田多切府谷澤山野本口羽山木川田井村林里嶋澤澤原井中井原橋橋橋橋  
氏名略信桜一真雪奈登紀津翠津江舟子芳枝舟子ミ子子秀枝雲子月子翠子子霞子子龍堂花子子琴香子勝子雲子子衣江子子代子薰子